

もうすぐ一年生！
障害のある子どもの
小学校入学ガイド

Q & A

はじめに

わが子の障害を受け止め、これまで手探りでの子育てをしながらがんばってこられた保護者の皆さん。

今度は小学校入学を控えて、就学先に悩まれていませんか？

わが子が地域の学校へ行った時のイメージを浮かべ不安ばかり……。

でも、これは、保護者であるあなたの不安。

もし、子どもにとって、ワクワクするような楽しい毎日が待っているなら、やっぱり誰もが地域の学校に行かせたいのじゃないでしょうか？

大阪では、重い障害があっても、家の近くの学校に通っている子どもさんが、実はたくさんいます。

この冊子では、少し先に地域デビューしている子どもの保護者や障害当事者・支援者が、自らの体験にもとづいて、地域で過ごすための提案をしています。

この冊子が少しでもあなたの不安をやわらげることになり、就学先選びの参考にいただければという思いで作成しました。

一緒に未来への扉を開いていきましょう。



目次

I 地域の学校？ 支援学校？ どっちが子どものためになる？

- (Q1) 地域の学校か、支援学校か、悩んでいます。どうやって決めていけばいいでしょうか。
- (Q2) 入学先を決めるにあたって、学校の見学や体験をすることはできますか。
- (Q3) 支援学校ではなく、地域の学校に行くメリットって何でしょうか。
- (Q4) 重い障害があっても、地域の学校に通うことはできますか。
- (Q5) 支援学校で専門家に教育を受けたほうが、子どもは伸びると思うのですが。
- (Q6) 子どもの将来を考えると、支援学校なら就職に向けた取り組みをしてくれるのでよいと思うのですが。
- (Q7) 支援学校のほうが先生の数が多いし、障害のある子に慣れていて安心できると思うのですが。
- (Q8) 地域の学校でも、子どもに合った教育をしてもらえるのでしょうか。
- (Q9) 地域の学校に行かせようとするのは、親のエゴだと言われるのですが。

II 地域の学校に行かせたいけど… こんなことが心配

- (Q10) わからない授業を一日中間かされても、しんどいだけではないでしょうか。
- (Q11) 他の子どもたちにもいい影響を与えられると聞きますが、初めは周りの子どもたちも理解がないはず。そんな中にわが子を入れるのはかわいそうだと思うのですが。
- (Q12) 地域の学校では、子どもはほったらかしにされるのではないのでしょうか。
- (Q13) 勝手に学校から抜け出すかもしれませんが、先生方は気にかけてくれるのでしょうか。
- (Q14) 車いす使用者ですが、学校にエレベーターなどの設備が整っていません。これでは無理だと思ったのですが。
- (Q15) トイレが自分でできないのですが、だいじょうぶでしょうか。
- (Q16) 一人で集団登校に参加するのは無理で、登下校に付き添いが必要。支援学校の送迎バス停留所は家のすぐ近くですが、地域の小学校までは遠く、親が送り迎えするのは難しい状態です。地域の学校に通うのは無理でしょうか。

- (Q17) 周りの子どもに迷惑をかけないかと心配なのですが。
- (Q18) 他の子どもの保護者からクレームが出ないでしょうか。
- (Q19) いじめにあうのじゃないかと心配なのですが。
- (Q20) 同じ学校に通っているきょうだいが、いじめられないでしょうか。

III 地域の学校では、こんな時、どうなる？

- (Q21) 肢体不自由の子の体育・図工の授業や校外学習は、どのように行われていますか。
- (Q22) 重度の知的障害があっても、友だちができますか。
- (Q23) 集団登校に参加させてもらえるでしょうか。
- (Q24) 障害からくるさまざまなニーズに対して、どんな配慮が受けられますか。

IV その他の疑問いろいろ

- (Q25) 地域の小学校の校長先生と話をしたら、拒否されている感じでした。やはり、行かせるのはやめておこうかと考えているのですが。
- (Q26) 入学前、子どもに必要な配慮を学校にお願いしに行きたいのですが、いつごろ行けばいいのでしょうか。
- (Q27) 地域の学校で、障害のない子の保護者ともうまくつきあっていけるでしょうか。
- (Q28) 地域の学校に行って、もししんどくなった時、途中で支援学校に変わることはできるのでしょうか。
- (Q29) 将来、普通高校への進学も考えていますが、障害があっても高校を受験できるのでしょうか。

V 地域の学校で学んで～障害当事者からのメッセージ

おわりに

就学や学校生活のことで困ったときの相談連絡先

I 地域の学校？ 支援学校？

どっちが子どものためになる？

Q1

地域の学校か、支援学校か、悩んでいます。どうやって決めていけばいいのでしょうか。

A ◇どちらも見学に行ってください。できれば、お子さんも連れて行ってあげてください。見学した時の子どもの様子や反応をしっかり見て、よりピッタリとくる学校を選びましょう。

「この子にはとてもそんなことわからない」とか「コミュニケーションができないから、どちらがいいと思っているかわからない」という場合でも、子どもの様子を注意深く観察すれば、何かサインを出しているかもしれません。

◇見学だけではわからないことも多いので、実際にそれぞれの小学校に行かせている親御さんたちに、学校の様子や子どもたちの様子などの話を聞くこともおすすめします。

◇大阪府教育委員会は「ともに学び、ともに育つ教育」を基本としていて、障害のある子もない子もいっしょに育つことが、すべての子どもにとっていいと考えています。小さいころほど、子どもたちは障害の有無に関係なく育ちあうので、その経験は、お子さんにとっても親御さんにとっても大事です。まずは地域の学校へ入学させることを前提として進路を決めるといいと思います。

◇地域の学校に行くことは、子どもの権利です。子どものこれからの友だちづくりのためにも、地域で生きていくための基盤づくりとして

も、「どちらに行くか？」という発想ではなく、「地域の学校に、どうしたら行けるか？」から、ぜひスタートしてください。



友だちと力を合わせて水やり

Q2

入学先を決めるにあたって、学校の見学や体験をすることはできますか。

A

◇体験は、学校と相談してみないとわかりませんが、見学は、希望すればどの学校もできるはずです。

◇支援学校は見学会の日がありますが、ふだんの様子はわからないことも多いので、別の日に個人的に見学に行くことをおすすめします。

◇忙しいという理由で見学を断られることもあるので、1学期中か2学期の早いうちをおすすめします。



呼吸器をつけていても、いなくても、みんなクラスの仲間

Q3 支援学校ではなく、地域の学校に行くメリットって何でしょうか。

A ◇子どもたちは、障害の有無に関係なく、たがいに成長しあいます。障害のある子は、周りの子に支えられたり、刺激を受けたりして成長します。障害のない子も、障害のある子といっしょに過ごすことで学ぶことが多いです。親や教師も、子どもたちの様子を見て学ばされます。

◇障害のある子どもにとってよいのは、地域の人とつながりができることです。子ども会や地域の行事などを通じて近隣の人たちに知ってもらう機会は、地域の学校に行くほうが増えます。地域の行事などにも同じ学校の子どもたちと参加できます。

●保護者の体験から

☆うちの子の場合、周りの友だちが、ひとりでできることには手を出さずに見守り、ひとりでできないことは手を貸してくれ、できることをサボっていると注意してくれていました。本人のためにどこまで手を出していいのか？は、おとな以上に子どもたちにはわかるようで、先生の言うことは聞かなくても、友だちの言うことなら聞くことがあります。また、周りにお手本がいたことで、集団生活でのルールや社会性など、訓練や療育をしなくても自然に身についていくようでした。子どもたちは、ことばのしゃべれないうちの子の思いをいつも考えるうちに、うちの子だけにかぎらず、相手の気持ちを考えるようになった、と担任から聞いたこともあります。

☆私の子が支援学校に行っている間は、「どうやらあそこに学齢期の子がいるらしい」と近所の人がなんとなく知っているくらいで、子ど

ものの顔などほとんど知られていなかったんです。ところが、4年で地域の小学校に転校して半月もすると、道を歩けば、「〇〇くん」「〇〇くん」と、あちこちから声をかけられるようになりました。それまで地域で孤立していたことを、そのとき、初めて知った次第です。

☆PTA活動や子ども会、地域の活動を通してさまざまな立場の方に知りあいができ、協力者が増えました。たとえば林間の登山のとき、車いすのわが子を「かついで登る!」と言ってくださった保護者の方がたくさんいました。私が外出するときは子どもを預かってもらったり、調子が悪くなって学校に送って行けないときは、ご近所の方がいっしょに送ってくださったり。また、その逆もあって、低学年で一人で行けない子を私がいっしょに連れて行ってあげたり、預かったり。何かあったとき、おたがいを知っているので助けあいができます。

●障害当事者の体験から

☆おとなになり、街中で同級生の友だちに会うたびに、地域の学校に通って良かったとつくづく感じます。もし私が支援学校に通っていたら、いろいろ楽しい経験もしないで、地域で孤立していたと思います。



この絵本、
おもしろいな

Q4 重い障害があっても、地域の学校に通うことはできますか。

A ◇もちろんです。重い障害のある子ども、大阪では、地域の学校で受け入れてもらえます。付き添いの先生や介助員、看護師などのサポートを受けることもできます。

◇周りの子どもたちも、むしろ重い障害のある子ほど障害特性を理解しやすく、支えてくれる場合が多いです。

●保護者の体験から

☆うちの子は最重度の知的障害があり、言葉もしゃべれなければ、入学時はオムツもしていましたが、あたりまえに受け入れてもらえました。1年生の2学期からは、学校でもトイレトレーニングを始めてくださいました。もちろん、保護者が付き添わないといけなようなことも一切ありませんでした。

☆うちの場合、自分で書いたり着替えたり、排泄をしたりすることはできません。体温調節もできませんし、てんかんもあります。すべてにおいて全介助です。しかし、その子に応じた配慮はしてもらえます。排泄ももちろん、おむつでオッケーですし、トイレトレーニングをしてもらっているお子さんもいます。食事の介助でも、普通食がかめないお子さんは、はさみなどで刻んで食べさせてもらっています。

●教師の体験から

☆重い障害のある子どもも含め、すべての子どもが共に育ち合っていることが、あたりまえの学校の姿だと考えます。

しかし、重い障害のあるお子さんを受け入れたことのない学校も多

くあるのが現状です。また、障害はそれぞれ違います。まずは「お子さんのことを知る」ことから学校は始めることになります。性格や障害、介助の仕方、一日の過ごし方、好きなものきらいなもの、保護者の願いなどについて、お子さん本人や保護者からひとつひとつ聞きながら教えていただき、いろいろと協力していただくことになります。また、障害のある子どもが学ぶための学校設備や人員の配置は、どの学校もまだまだ十分とは言えません。保護者との教育方針のずれや、お子さんや障害についての理解が深まらないといった課題が出てくることもあるかもしれません。

保護者と学校・教師が時間をかけて協力関係を築き、子ども自身の思いを受け止めながら、目の前の課題をひとつずつ解決していく必要があります。

●障害当事者の体験から

☆私は脳性まひによる手足と言語の障害をもっていますが、両親は一人の人間として生きてほしいという思いがあり、市立保育所の障害児保育を経て、小学校から高校まで地域の普通学校の一般教室で障害をもたない仲間たちと学んだり遊んだりしました。10年間近く学校でいじめられてつらい思いをしたこともあったけれど、友だちが支えてくれて乗り越えることができました。



できないところは支えてもらって

Q5

支援学校で専門家に教育を受けた
ほうが、子どもは伸びると思うの
ですか。

A ◇支援学校には、理学療法士、作業療法士、言語療法士といった「専門家」もありますが、支援学校の教師がすべて「専門家」であるか、というそうでないこともあります。教員免許があれば支援学校の教師になれるので、支援学校に特別支援教育の免許を持っていない教師が多くいます。

◇では、支援教育の免許さえあれば「専門家」か、といえばそれも違います。地域の学校で、支援教育の免許がない教師が、素晴らしい支援教育・共生教育をしている例がたくさんあります。

◇子どもが伸びるかどうかは、教育カリキュラムよりも、おとなの関わり方や、周りの子どもたちの関わり方によって大きく左右されるようです。必ずしも支援学校のほうが、子どもは伸びるというわけではありません。

●保護者の体験から

☆私の子どもが行っていた支援学校では、入浴学習や外食体験など、地域の小学校ではあまり行われていないような授業の時間がありました。また、スクールバスで学校に着いてから、校内服（体操服）に着替える時間や、給食の準備も「学習」と位置づけられていました。ただ、先生の数が多く、子どもの数が少なく、みな障害をもつ子ばかりなので、子どもどうしのかかわりや子どもどうしの学びが少ないと感じました。学校で学ぶ教育とは、先生から教えられるものばかりでしょうか。子どもどうしのかかわりの中で得ていくものも大きいと思いま

す。

☆子どもが小さいころ、支援学校で専門家に教育を受けたほうがいいと私も思っていました。しかし、実際はかなりちがっていました。親や専門家が何度言ってもできないことが、お友だちに言われるとすぐできるようになったりします。いちばんびっくりしたのは、リハビリのときに歩行器で自分の足でけっかも前に進まなかったのが、学校では、運動場のようなデコボコな地面でも、お友だちに「ここまでおいで～」と言われるとすんなり進んでいるそうです！ リハビリの先生も「うそやろ！ ビデオに撮ってきて！」というほど驚かれていました。お友だちの力は、専門家よりもかなりすごいです！

●教師の体験から

☆「専門家」でも、「その子ども自身」を無視した関わりは、「できないことをできるようにすること」のみになってしまう危険性があります。それは支援学校であれ地域の学校であれ同じです。「障害を理解する教師」でなく「障害を含めたそのお子さんまるごとを理解する教師」が、子ども自身がもつ伸びる力を引き出すことができるのです。子どもが伸びるかどうかは、支援学校か地域の学校かが問題ではなく、お子さんに合っているかどうか、保護者の方がその学校の教育や雰囲気に関心できるかどうか、ではないでしょうか。

Q6

子どもの将来を考えると、支援学校なら就職に向けた取り組みをしてくれるのでよいと思うのですが。

A ◇支援学校では、中学部になると多少の職業的な作業や実習の時間がありますが、卒業後は、ほとんどの方が作業所や授産施設に通っているのが現実です。

◇就職にいちばん必要なことはコミュニケーション能力であるといわれています。人と人とのつきあい方をいろんな形で学べるのは地域の学校です。地域の学校で仲間とともに過ごしたほうが、支援学校より選択の幅が増えると思います。



工夫すれば、組体操だってできる

Q7

支援学校のほうが先生の数が多いし、障害のある子に慣れていて安心できると思うのですが。

A ◇確かに先生は、支援学校のほうが多くいます。しかし、障害のある子ばかりがいる支援学校では、圧倒的に大人（先生）の手を必要としています。このため人手が足りず、質のいい教育、自分たちが希望する教育をしてもらえるとはかぎりません。

◇地域の学校は先生の数が不十分です。ただ、数少ない先生の目を補ってあまりあるたくさんの友だちの目があり、心強く頼もしい力を発揮してくれます。

●保護者の体験から

☆先生の数が少なくても、地域の学校ではその分、お友だちがたくさん関わってくれます。先生は、その学年だけの担当だったりして、次の年に一から説明しないといけませんが、子どもたちはずっといっしょなので、年々たくましくなり理解も進み、言語障害のある子のことでも、先生がなかなかわからなくても周りの子どもたちが通訳してくれたり、「こうしたら〇〇ちゃんは怒る」とか「こんな時はこうしたらいいよ」としっかりフォローもしてくれます。

☆地域の中学校を卒業して、支援学校高等部へ行くと、スクールバス内で自傷が激しいうちの子に対して、「専門家にみてもらってほしい」「バスに乗せず、保護者が送迎してもらえないか？」等々を担任から言われ、ショックでした。どこに行っても、学校との話し合いが大切と感じました。

Q8

地域の学校でも、子どもに合った教育をしてもらえるのでしょうか。

A ◇地域の学校のほうが、個別のニーズに合わせた教育をしてもらいやすいです。障害のある子の数が少ないので、それぞれの子に応じて学習することが多いです。ただ、保護者が学校と話をしていく必要があったり、学校によっては理解のないところもあり、学校により差があります。

◇支援学校では、学年全体で同じ内容の授業を受けることも多く、また、似たような障害の程度でグループ分けをして、グループごとに同じ授業を受けます。学校でお風呂に入る練習ができたり、中学部では手芸や陶芸の授業などもあります。授業内容に保護者の意見を反映してもらえることは非常に少ないです。

●保護者の体験から

☆うちの子の場合、「卵を割ることが好きだ」とか「自宅で包丁を使うようになった」と告げると、学校でも調理実習の時間を増やしてくれたり、卵を使う料理を採り入れてくれたり、包丁を使わせてくれたりしました。また、「スーパーでの買い物時にレジへ行くことを覚えた」と告げると、学校でも買い物ごっこなどを学習の中に採り入れてくれました。特別に近くのスーパーへ買い物にも連れて行ってもらいました。

☆子どもたちの力には、すばらしいパワーがあります。「お楽しみ会で、何ができるかな？」といっしょに考えてくれて、「はさみを使ってものを切り抜くのが好きなようだから、自分たちといっしょに切り絵をしよう」と提案、宿題も作ってくれて、「家で、切り絵の練習を

させてあげてください。お手数ですが、お母さん、よろしく」と手紙をつけて渡してくれたりしました。教育や保育にかかわったことのない私には、想像もつかないことでしたが、お友だちの力というのは、すごいパワーがあるのです。

●教師の体験から

☆教師は、一人ひとりの子どもたちに「どんな力が必要か」を考えて、日々取り組んでいます。すぐに成果が出ることは少ないかもしれませんが、しかし、お子さんについて理解が深まれば、いろいろな取り組みができます。結果として教師が予想もしなかった成長が見られることも多くあります。地域の学校には、大人が想像する以上に、子どもどうしの力の相乗効果があることは確かです。

また、市町村によって異なりますが、年3回ほど学校を巡回する理学療法士や作業療法士、言語療法士からのアドバイスを受け、必要なストレッチや運動、遊び等も学習の中に組み込んで行います。文字や数字や計算などの基礎の学習も、そのお子さんに合わせて取り組んでいます。

Q9

地域の学校に行かせようとするのは、親のエゴだと言われるのです。

A ◇どんな障害があっても、一人の子どもに変わりありません。障害のない子は地域の学校に無条件に通うのですから、障害のある子も同じように地域の学校に通う社会がむしろあたりまえで、親のエゴではなく、あたりまえのことを言っているということなのです。

◇親にとっては、地域の学校に通わせるほうがしんどいと思います。つらいことも多いと思います。それでも、その道を選んでいるのです。見栄やエゴで地域の学校を選ぶことはできません。

●保護者の体験から

☆地域の学校に入学させたとき、私も「親のエゴだ」と言われました。しかし、今では「いっしょにいてよかった」と言われるようになりました。みんな、あまり接したことがないから「障害」＝「特別」だと考えるのだと思います。ことばで表現するのはとても難しいですが、いっしょにいと、きっとみんな気づけることがたくさんあります。私も、今でも日々、子どもたちから教えられることばかりです。最初は「親のエゴ」だと言う人も、いっしょにいてできると理解してくれると思います。

☆小学校入学時、地域の学校に行かせる決断をした時、同じように地域の学校を選んだ障害児のお母さんから「養護学校の方がいいんじゃない？」と言われたことは、大変ショックでした。うちの子は、最重度の知的障害児で、そのお母さんの子は、軽度のお子さんでした。で

も、地域の学校で、同じクラスの仲間として、あたりまえに子どもたちどうしが関わりあっている姿を見ると、200パーセント地域の学校に行ってよかった、と思います。後に『ピープルファースト』という当事者運動を知って、親としては衝撃を受けました。“障害者”ではなく、ひとりの人間として見ないといけないことを思い知らされ、やはり中学も地域の学校を選びました。言葉もしゃべれない娘に、先生方も最初はとまどっていましたが、子どもらの普通に接している姿を見て、だんだんと慣れていかれたように思います。親子ともども、本当に充実した学校生活を送ることができました。卒業メッセージの中に、クラスメイトからのたくさんうれしい言葉がありましたが、そのひとつに『授業中、うるさかったな。でも、それが一番だよ！』と男の子から。うれしかったです。



Ⅱ 地域の学校に行かせたいけど…

こんなことが心配

Q10

わからない授業を一日中聞かされても、しんどいだけではないでしょうか。

A

◇しんどいと思いますが、しんどいだけではないでしょう。授業内容の全部がわからなくても、一時間の授業のなかで少なくとも何かひとつは、子どもはキャッチすると思います。

◇授業のなかで子どもたちは教科書以上のことをたくさん学んでいます。周囲の子どもたちの様子や先生の表情や、その他いろいろ、クラスのなかで起こっていることをクラスメイトとともに体験することは大きな経験だと思います。社会のルールやマナーなどは、集団のなかで、友だちのをまねて身につくことがほとんどです。

◇おとなの感覚で「わからない」と決めるのは失礼なのではないでしょうか。

●保護者の体験から

☆うちの子の場合、他の子とは全くちがう『遊び』みたいなことをしていました。パズルやお絵かきなど。それでも、授業中は、《静かに座っておく》《発言するときは手を挙げる》《授業によっては、ひとりずつ前に出て発表する》《プリントを配る時は一枚ずつ取って後ろの友だちに渡す》《授業の前と後には一礼をする》など、いろんな学びがあったと思います。また、うちの子も前に出て発表させてもら

機会を先生や友だちが工夫して作ってくれたり、楽しいことも多かったです。

☆うちの子に聞いてみますと、「いい人（先生のこと）やお友だちがいるので、わからなくてもたのしいです。つらくない」と答えました。

●教師の体験から

☆親御さんが「この子には知的障害があり、教科の理解は難しいです」とおっしゃっていましたが、みんなといっしょに学習していくうちに、黒板に書かれたことをノートに写したり、先生の言葉が書きとめられるようになった子どももいます。また、友だちの名前をひらがなで書いていくうちに、ひらがなを読んだり、書いたりできるようになった子どももいます。他の子どもたちもがんばって授業を受けている様子を見ながら、自分もまたがんばろうと思うようになります。またその逆で、寝ている友だちのことを見ながら、「〇〇ちゃん寝てる。私も寝る」って言ったり、子どもたちの様子をよく見ています。同じ時間を過ごすことで築き上げられる人間関係、学びの世界はとても大事だと思います。

☆教師をしていて、大人にはわからない「子どもどうし共鳴し合うアンテナ」というものがあるのだと感じるようになりました。毎日ひらがなを学習してもなかなか覚えられない子どもが、友だちの名前なら読めて、その友だちにノートを渡しに行くことができるようになったり。いい言葉もわるい言葉もひっくるめて、子どもどうしの会話から自然と覚えて言葉が増えたり。「わからないこと」「知らないこと」「わかりにくいこと」「嫌いなこと」……段階や思いはそれぞれさまざまだと思いますが、障害のある子どもも、障害のない子どもも、学校で毎日「新しいこと」を学んでいるのだと思います。

Q11 他の子どもたちにもいい影響を与えられると聞きますが、初めは周りの子どもたちも理解がないはず。そんな中にわが子を入れるのはかわいそうだと思うのですが。

A ◇どこに行っても、最初はわが子のことはわかってもらえません。それは支援学校でも同じことです。ただ、地域の学校では、障害のあることがわかりやすい子ほど、その子に合わせたかわりをしてくれますが、支援学校では、周りも障害のある子なので、なかなかわかってもらえません。地域の学校の子どものほうが順応性は高いと思います。

◇はじめは知らないどうし。それは他の子どもたちも同じです。毎日いっしょに過ごすうちに、たがいにぶつかり合ったり、泣いたり笑ったりしていくうちにだんだんわかりあえるようになってきます。はじめから何もしないで理解しあえるわけではありません。

●教師の体験から

☆私は中学校の教師をしていましたが、中学に上がってくるころには、子どもたちはみんな障害のある友だちのことがわかっています。私は、そんな子どもたちに教えられながら、子どもたちと接してきました。授業中に「眠たい、寝ていい？」と聞く○○。「あかんよ。みんながんばってるから、○○もがんばり」と私。すると、「○○は夜、眠れないから、『寝ていい？』って聞いたときは寝さしたらなアカンねんで」「○○には必要なことやから、特別扱いにはならへん、寝させへんほうが問題や」と周りの子どもたち。保育所や小学校からいっしょ

に過ごしている彼らには、何が必要で、どうしたらいいか、ちゃんとわかっていました。



給食の時間 僕は経管栄養剤 友だちの給食も時々、味見

Q12

地域の学校では、子どもはほったらかしにされるのではないでしょう
うか。

A ◇地域の学校でも支援学校でも、どちらも先生の手数は足りていないので、“ほったらかし”にされる場合があります。ただ、一日中ほったらかしにされることはあり得ないと思います。

◇学校での様子がわかりやすいのは、地域の学校のほうで、周りの子どもたち、時にはちがう学年の子どもたちが学校での様子を伝えてくれます。支援学校では、周りの子どもたちは離れ離れの地域から来ていますし、ほったらかしの実態を見ているとなかなか伝えにくいのが実際です。

●教師の体験から

☆配慮の必要な子どもがいたら、教師は、必要な配慮をしようと努めます。最初はもしたら必要な支援ができるかわからず、困ることもあります。あれやこれや工夫しているうちに、必要なことは何か、周りからどのような働きかけをしたら安心して過ごせるようになるのか、わかってきます。そのために保護者の方からご意見をお聞きしたり、周りの子どもたちに聞いたり、いろいろな方法を模索します。十分に手が回らずに、ほったらかしに見える状況もあるかもしれませんが、子どもたちもいます。何もしていないように見えても、いつも気にしてくれている子どもたちもいます。

☆関わられ続ける状態は、誰にとっても息苦しいものではないでしょうか。支援学校でも地域の学校でも「一人遊び」「一人でほっとする

時間」をとることはあるでしょう。学校ではより教育的配慮がされた時間が用意されるべきですが、いわゆる「ほったらかし」の状態になる場合もあるのが現実です。

しかし、多くの教師は子どもたちに「何らかの力をつけたい」「できることを増やしたい」と考えています。一見「ほったらかし」に見える状態も、教師のいろいろな「しかけ」や「橋わたし」的な役割によって、まわりの子どもたちとの関係性や「学び合い」を引き出す教育的なねらいがあることもあります。気になるときには、教師に問いかけてください。「一人で何もしていないように感じて心配です」と。教師に意図がある時はその内容が返ってくるでしょうし、教師の不注意だった場合は改善されると思います。



この問題、わかる？ みんなでお勉強

Q13

勝手に学校から抜け出すかもしれませんが、先生方は気にかけてくれるのでしょうか。

A ◇あらかじめ学校の先生に伝えておくと、気にかけてくれます。どんな学校でも、安全面は第一に考えます。保護者以上に神経を使ってくれると思います。

●保護者の体験から

☆私も入学前はとても気がかりでした。保育所では門にカギをつけてくれていたのに、小学校の門は、当時はオープンでしたから。でも、入学してみると、保護者が心配する以上に学校のほうが気にしてくれるので、全く心配いらないと思いました。

●教師の体験から

☆大阪教育大学附属池田小学校の事件以来、ほとんどの学校が門の施錠を行うなど、安全面で多くの注意を払っています。すべての子どもについて、学校内にいることが確認できない場合、学校全体ですぐに動き、居場所や安全を確認できるまで探します。ましてや障害のあるお子さんは危険を避けることが難しい場合も多くあるので、学校から出てしまわないよう、最大限の注意を払っています。

Q14

車いす使用者ですが、学校にエレベーターなどの設備が整っていません。これでは無理だと思ったのですが。

A ◇一般的には、階段昇降機か介助員か、その両方を手配してくれます。それ以外にもいろいろな方法がありますので、はじめから無理とあきらめないで、学校や教育委員会と相談してみてください。

●保護者の体験から

☆エレベーターがなくても、教室を1階にするなど、いくらでも対応はできます。うちの小学校にもエレベーターはありませんが、車いすの子らが楽しく学んでいます。

☆知人の車いす使用者の子が中学に入学する時に『介助員をつけて欲しい!』と要望されましたが、結局、学校には昇降機しかつきませんでした。昇降機を使うのが面倒なときには、友だちらがかついでくれていたようです。翌年、念願の介助員さんが配置されると、友だちらの助けはいらなくなりました。でも、友だちらに支えてもらっていたほうが、ずっとよかったそうです。

●教師の体験から

☆今まで車いすの子どもたちが入学してきたときに、いつも生活する教室を、1階の教室にする、障害者トイレに近いところにするなどの工夫をしてきました。たとえば理科室・音楽室・美術室など教室移動で階段を使う場合は、その時間割を全体の教師に伝えて、複数の教師

で車いすをかつぐなどの工夫をしています。また子どもがこわがらない場合は、階段昇降機を使用したこともあります。

☆学校で「あそびの広場」の催しがあるとき、車いすを利用する子どもが多い学校では2階以上の教室は使わず、1階でできるよう工夫をしました。どうしても2階以上の教室を使用する場合は、介助員や教師が付き添って、昇降機や数人で抱えて上るといったこともしました。

昇降機は、骨折した子どもが4階の教室に上がるため使用することもありました。医療的ケアのための看護師やバリアフリーの施設（トイレやエレベーター等）や器具は、障害のある子どもだけでなく、どの子どもにとってもメリットがあることを教育委員会等に訴えていく必要があります。すぐには実現しない場合も、ずっと要望していききたい課題です。



運動会も、もちろんいっしょに

Q15

トイレが自分でできないのですが、
だいじょうぶでしょうか。

A ◇先生は手を貸してくれますので、だいじょうぶです。また、介助員が配置される場合もあります。トイレの介助は生活のうえで必要なことなので、学校にそのサポートを申し入れて、生活がスムーズに行えるように要望したらいいと思います。

●保護者の体験から

☆うちの子の場合、入学時はオムツをしていましたが、オムツ交換も同性の先生方がしてくださっていました。やがて、学校のほうからトイレトレーニングをしましょう～！と言い出され、半年もしないうちにオムツははずれました。

●教師の体験から

☆今までもトイレ介助が必要な子どもはたくさんいました。休み時間にいっしょにトイレに行くこともあります。脳性まひなどの障害のために一人で介助が難しいときは、教師どうしで声をかけあって同性介助ができるように配慮します。

☆トイレが自分でできないお子さんも、地域の小学校にたくさん入学してきます。介助が必要なお子さんには、オムツを使用し定期的に交換もします。小学校でトイレトレーニングをスタートすることもあります。決まった時間にトイレに行き、出ても出なくても便座に座ることから始めます。家庭ではじっくりトイレトレーニングに取り組むことが難しい場合もあります。いわゆる「勉強」といった学習だけでなく、トイレや着替え、移動など、その子どもに応じた課題も、学校での学習に取り入れています。

Q16

一人で集団登校に参加するのは無理で、登下校に付き添いが必要。支援学校の送迎バス停留所は家のすぐ近くですが、地域の小学校までは遠く、親が送り迎えするのは難しい状態です。地域の学校に通うのは無理でしょうか。

A ◇お友だちや周囲の人たちをまきこんで、通学できるように方法を探しましょう。同じ学年の仲間とともに登下校する機会を増やしたり、それでもどうしても困る場合には、地域によって移動支援（ガイドヘルパー）が利用できる場合があります。役所の担当課だけではなく、民生委員、ボランティアセンター、子ども会やご近所の世話役さんなど、あらゆる方に相談して応援してもらいましょう。有償でファミリーサポートセンターを利用するなどもできます。

◇支援学校の場合、送迎バスがありますが、バスに乗り遅れると、遠くの支援学校まで送っていかないといけないので、その場合はもっと大変です。また授業時間が短く、帰りは地域の学校よりも早いです。地域の学校であれば、親の急病や入院など緊急の事態にも、先生や友だち、近所の人なども力になってくれることが多いですが、支援学校は遠いので、そういうことが難しいと思います。

●保護者の体験から

☆私の場合、登下校の付き添いは大変だったけど、楽しかったです。登下校中にいろんな子と知りあい、仲よくなりました。小学生の子相

手に友だち感覚になっていましたが、これは、障害児の親の特権だと思っています。子どもたちの悩み相談なんかを受けている場合もありました。また、子どもたちを見守っている地域の方々とも知りあい、親子ともども、たくさんのつながりができました。

●教師の体験から

☆一人で登下校するのが難しい場合、「保護者の責任において登下校する」というのが、ほとんどの学校の考え方です。また、保護者が付き添いが必要ないと判断した場合も、学校側から安全面で登下校に不安がある場合は、登下校の付き添いをお願いすることもあります。もちろん緊急時等には、教師が送り迎えをすることもあります。学校に来にくいお子さんへの登校支援も増えており、支援の必要なお子さんに柔軟な対応をとる学校も多くなってきています。

●障害当事者の体験から

☆私の場合は、小学校から同級生の仲間が車いすを押してくれて通学していました。



Q17 周りの子どもに迷惑をかけないかと心配なのですが。

A ◇迷惑はかけると思います。でも、周りの子ども迷惑をかけあいながら育っていきます。また、毎日いっしょに過ごしているうちに、子どもたちは、困ったことがあっても慣れて(?)いきます。

◇たとえば、声が出てしまう子どもがいたときに、周りの子どもたちはうるさかったら「静かにして」ということもあります。別に気にならないときには「いまは機嫌がいいから声がでるんだね」とか「～～がいやで抵抗してるんだね」とか、その声の出し方によって気持ちがわかったりします。それは「迷惑」ではないと思います。どうして声を出すのか、何を訴えているのか、いろいろと考えることができます。いっしょに過ごす仲間なので、迷惑という感覚とは少しちがうと思います。

●保護者の体験から

☆私もずいぶんそれで悩みましたが、「おたがいさま」と言ってくれたりするので、あまり心配しないでもいいのでは？

☆数えきれないほど、迷惑をかけてきたと思います。でも、物を壊したときも、たまに怒る子もいましたが、うちの子を否定する子はいませんでした。大声を張り上げて泣き出すと、子どもたちは音楽を流してあげて！とか、暑いのかな？と下敷きであおいでくれています。保護者も好意的で、参観のときなど、声をかけてくれる方が多かったです。「迷惑かけるかも？」と心配せず、「ありのまま」を子どもたちや保護者に知ってもらえばいいのでは？ そのほうが、地域で楽に

生きていくことができると思います。

●教師の体験から

☆障害のあるお子さんが、とにかく大きな声でしゃべる友だちのことを「嫌だ」と困っていたことがありました。また、こんなことも。読書をなかなかやめずに、給食の用意を全然しないうちの息子に、同じクラスの障害のあるお子さんが「本かたづけて、給食の用意をしーや」と声をかけてくれていたそうです。実際には子どもたちのすることのほとんどは「迷惑」にはなりません、迷惑をかけ合ったり、助け合ったりしながら、折り合いをつけて過ごすのが学校や社会のあたり前の姿だと思います。



特製コロコロを車いすにつけてそうじ当番

Q18

他の子どもの保護者からクレームが出ないでしょうか。

A ◇クレームが出ることはあるかもしれません。でも、よほどのことがないかぎり、クレームを出す方はいません。逆に、あたたかく見守ってくださる方は非常に多いですし、子どもが目立つ分、知りあいになる保護者が自然に増えていきます。

◇支援学校のなかでもクレームが出る場合があります。

●保護者の体験から

☆うちの子の場合、いろいろなことをやりましたが、クレームは一度だけ。「みんなそう言っている」と一人の方に言われ、大変悩みましたが、あとで確かめると、他の人はみんな「おたがいさまやし」と言っていたそうです。

☆私の耳には、小中学校の9年間、一度も入ってきませんでした。逆に応援してくれる方が多く、うれしい言葉なら、ここに書ききれないぐらいあります。

●教師の体験から

☆学校がしんどい状況にある（なかなか授業が成立しない、子どもたちがいうことを聞かない）時、保護者の方は学校の教育体制そのものにクレームをつけることがあります。でも、私は今まで、障害のある子どもがクラスにいるからとクレームを受けたことはありません。むしろ、障害のある子どもがいることで、障害児学級担任の先生もクラスに入り、より多くの教師の目で子どもたちをみることができるので、いっしょに過ごせてよかったとの意見のほうが多いです。

☆嫌なことや何か訴えたいことがあると、近くにいる友だちをひっかく子どもを担当したことがあります。教師は兆候を察知すると止めに入りますが、タッチの差で間に合わないこともありました。ひっかかれたり、深いひっかき傷が残った子どもの保護者たちからクレームが出ました。ひっかくきっかけや理由は必ずあるはずでしたが、はっきりと突き止めることができず、ひっかかれた子どもを納得させられないまま、下校させていたからです。結局、私はその子どもを理解できないまま、クレームに対してきちんと対処できず、原因を「障害」のせいのみにしてしまった苦い経験があります。

まず、教師が障害のある子どもを知り、他の子どもや保護者に理解を求める努力が、どの子どもも安心して学校にいるためには大切なことです。ほとんどのクレームが学校や教師の対応が原因だと思います。



Q19

いじめにあうのじゃないかと心配
なのですが。

A ◇障害のあることが見た目にもわかりやすい子は、障害のない子に比べても、むしろいじめの対象になりにくいです。ちょっとからかわれるようなことならあるかもしれませんが、それは、障害のない子たちの間でも日常茶飯事でしょう。逆に、ふだん乱暴な子が、障害のある子にだけは優しく接するような場面も多いです。

◇障害が見た目にわかりにくい発達障害などの子の場合、周りの子どもたちも理解がしにくく、普通に会話できるのに空気が読めなかったり、友だちの言うことをかんちがいで誤解が生じたり、トラブルになることが多いです。そのため、いじめの対象にもなりやすいのが現状です。

◇いじめにあったら、担任や学校とよく連携をとって、場合によっては保護者から子どもたちに話をさせてもらおうと思います。その時、大切なことは、いじめをした子を責めない、自分の子と仲よくしてほしいと要求するのではなく、「自分の子の障害をわかってほしい」という姿勢でていねいに伝えるのがいいと思います。また、お子さん自身にも、助けてほしいときには、周りに伝えるということを練習させていくといいのでは？と思います。おとなになってからも必要なことですから。

◇地域の学校へ行く最大のメリットは、理解者が増えていくことだと思います。いじめやトラブルがあったときこそ、理解者を増やしていくチャンスになりますから、勇気をもって前に進んでほしいと思いま

す。

●保護者の体験から

☆うちの子の場合は、いじめにあうどころか、学年をこえて名前を覚えてもらい、上級生からもかわいがってもらっていました。上級生になると、低学年の子からも。中学へ進んでからも、学校内でいじめにあうことはあり得ない雰囲気でした。ただ、小学校卒業後、数年たってからは、道で会う小学校低学年ぐらいの子から、からかわれることがありました。ふだん接してないと、そうになってしまうんだと思います。

☆うちの子の場合、わざといやなことを言われたり、冷やかされたりということはあったようです。「その時、どんな気がしたの？ つらくなかった？ どうしたの？」と聞くと、「気がつかないふり知らんふりをしていました。そうすると、向こうもつまらないので、あきて、そのうち、何もしなくなりました」と答えてきました。子どもとはいえ、したたかな部分があります。上手に流しているのだと知りました。

●教師の体験から

☆たがいのぶつかりあい、ときにいじめのように現れることもあると思いますが、それがいじめならば、クラスで子どもたちどうし、十分に話しあい、解決していこうとします。そしてよりわかりあう関係になっていくと思います。「男の子に肩をこづかれていじめられた」と抗議のために、保護者の方が学校に来られたことがありました。その男の子は、ふだんからその障害のある子どもに興味があり、呼んでも返事をしないので、肩をたたいたとのことでした。その力が強くこづいたことになったのは申しわけないと謝りましたが、いまではたがいに気持ちが通じて仲よしです。

☆「障害」があるからいじめられるとは限りません。弱い立場の子どもや、ちょっと違う存在をいじめる「ムード」があるから、障害のある子どももターゲットとなり、いじめられることがあるのが現実です。

まず、誰もいじめることを許さない、また誰もいじめられることを許さないムードづくりが学校に求められます。もし、いじめが改善しなければ、あらゆる方法で一時的に避難する必要があると思います。

●障害当事者の体験から

☆私は10年間近く学校でいじめられたけれど、友だちが私の自宅に遊びに来てくれて、自宅での生活を知って、共に遊んだ仲間が支えてくれて心強かった。よく理解してくれる仲間が支えてくれると、つらい思いも乗りこえられ、成長できます。



ひとりひとり、いろんな子どもがいてあたりまえ

Q20

同じ学校に通っているきょうだい
が、いじめられないでしょうか。

A ◇きょうだいがいじめられるというのは、私たちは一度も聞いたことはありません。ただ、親の意識のなかにわが子を『かわいそう』とか『はずかしい』などという感情があると、その気持ちを察知して、きょうだいにも（本人も）同じように卑屈になってしまいます。そうすると、相手が本気でからかっていない場合でも、ちょっとした言葉に傷ついてしまうかもしれません。

◇親が、障害があってもこの子は大事なうちの子ということをしっかり心の中にもち、そのことを周囲にも示しておけば、きょうだいも、周囲の子たちも、その思いを感じて、からかったりいじめたりということはないだろうと思います。

●保護者の体験から

☆うちの子の場合、小学生のときに、上の子は、友だちから「おまえの妹、障害児なん？」と聞かれることがあって、「そうやで。（それがどうしたん？）」とふつうに答えていました。友だちも「へ～え」という感じだったと思います。女の子からは「〇〇ちゃんが妹でいいなあ～」とうらやましがられていたこともあります（笑）。運動会では、妹のことを知る友だちらが応援しだすと、やがて上の子の学年全員の子から「〇〇ちゃん、がんばれー！」と応援してくれていました。とてもうれしかったです。

☆うちの場合は、弟がいるのですが、そんなことはなかったようです。毎日、母が学校に付き添いで行っているの、弟の学年の子らとも仲よくなり、「あのな、お兄ちゃん、こんなことしてたで」「注意しとっ

てやった」とか、弟の友だちもいろいろ教えてくれました。家に遊びに来て、「ああ、あのお兄ちゃんいるなあ」て感じで、DSゲームができないお兄ちゃんが、後ろから弟と友だちが遊んでいるゲーム機をじろじろ見ている、あたりまえな顔をしています。

●教師の体験から

☆いじめられなくても、障害のある子どものきょうだいは、その子のことを自分のクラスメイトや周りはどう見るだろうかと、ドキドキしています。私の場合は偶然、担任していた子の弟（言葉は全然しゃべらず、脳にシャント、心臓にペースメーカーを装着していました）が午後、自転車に乗って学校に遊びに来ました。私は図工の時間だったこともあり、教室にその子を入れていっしょに勉強しました。お兄ちゃんの動揺ははた目にもよくわかりました。けれども、2時間たって帰りの会のころには弟はクラスの人気者になり、お兄ちゃんの顔もゆるむようになりました。その後、何回も弟は学校に遊びに来ましたが、お兄ちゃんは別の学年の子どもが変な顔で弟を見ても気にしないようになりました。クラスみんなが、弟を受け入れてくれたのを実感できたことが大きかったと思います。

Ⅲ 地域の学校では、こんな時、どうなる？

Q21

肢体不自由の子の体育・図工の授業や校外学習は、どのように行われていますか。

A

●保護者の体験から

☆うちの子の場合、基本的にみんなと同じことをやっています。同じことといっても、手も使えない重度の肢体不自由なのでかなり工夫してくれているようですが。

たとえば、ポートボールやバスケットなどはうちの子がボールを運んでいる間、3秒は誰も手を出せないとか、いろいろルールを工夫してくれていて、パスしてもらったりシュートしたりと活躍しているようです。「〇〇が入ると最強や！」と子どもたちが言っているようです。なわとびなどは、歩行器に乗ってへびにしてとんだり（綱を渡ったり）。今年の組み体操では、体格の良い子が肩車して後ろから先生が支えてくれました。

図工も先生が手を持って描かせてくれたり、うちの子が色を指示して塗ってもらったりしています。学年が上がり、図工室での授業の時、簡易なイスしかないので車いすで授業を受けていると、うちの子が「みんなといっしょのテーブルで描きたい」と言ったそうです。先生が「イスに座れないからがまんして」と言うと、それを聞いていたお友だちが「そしたらオレ、〇〇といっしょに下で描くわ」と言い、そのグループの子が次々に「オレも〇〇と一緒に描く！」「私も！」とみんないっしょに下で描いてくれたそうです。

校外学習も親がついて行くことはなく、高学年になるとグループ行動が増えるのですが、先生が見守って子どもたちが車いすを押してグ

ループで行動しています。低学年のころからいつも車イスを押してくれていると、高学年になると、知らない大人よりもかなり頼りになります！

●教師の体験から

☆脳性まひの子どもの場合、他の子どもたちがマット運動をしているときに、同様にマット運動をして、体の緊張をほぐしたり、その子ができる範囲内で同じような種目を行ったり、必要な運動をしていました。球技の試合などでは、急にボールが当たる時は危険なので、サポートの教師も一緒にコートに入ることもあります。たとえばバスケットの試合で、試合中にボールを受けたり、ドリブルすることは難しいですが、コートからボールが出たとき、最初にボールを投げることはできます。チームメイトがシュートすれば喜ぶし、相手方に点が入れば、くやしがるのは他の子どもたちと同じです。

図工・美術の授業も他の子どもたちと同じ課題に向かい、彫刻など本人の力だけでは難しい時は、サポートの教師が手を添えるなどの手助けをしてきました。

校外学習・修学旅行などは、行き先の選定に配慮し、障害を考慮した下見（トイレ・行程など）を繰り返し行い、本人が可能なかぎり、みんなと同じに活動できるようにサポートしてきました。

●障害当事者の体験から

☆体育の場合は、クラスの体育を運動場や体育館でする時は、クラスの仲間が授業を受けている横で付き添いの先生とともにリハビリ的なことをしていました。例えばサッカーの授業では、付き添いの先生とボールを蹴っていました。図工の時は、付き添いの先生といっしょにクラスの授業を受けて、付き添いの先生のサポートで工作をしていました。校外学習の時は、クラスの仲間が交替で車いすを押してくれました。このころは介助員制度がなかったので、仲間が手伝ってくれることで、友人関係を続けることができました。

Q22

重度の知的障害があっても、友だちができますか。

A ◇子どもが友だちを求める気持ちは、障害があってもなくても同じです。障害の程度が重度の子ほど、周りの子どもたちがその子のことを理解しやすく、いろんな支援をしてくれます。コミュニケーションがとりにくいお子さんの場合も、周りの子は積極的に関わろうとしてくれます。

◇子どもたちは自然な流れの中で生活していますが、人と人が関係性を持つためには、時には先生や親の声かけも大事です。いろんな工夫をしながら、いっしょに過ごしていくことで、互いに支え合う友だちになっていくと思います。

●保護者の体験から

☆うちの子は言葉もなく、自分から人に関わろうともしないので、本人にとっては、どこまでを友だちといえいいのか、よくわからない状況ですが、小学校の時は、家に遊びに来てくれたクラスの友だちがいたし、遠足や林間学校、修学旅行などでの班決めの時は、同じ班になりたがる子もいて、中学3年生まで一度ももめたことはありませんでした。特に小学校では、他学年の子からも人気者でした。中学でも、クラブにいっしょに参加する日を楽しみにしてくれたり、修学旅行を楽しみにしてくれていた友だちがいました。友だちに関わってもらっても、本人は知らん顔でしたが、でも、みんなといっしょにその場にいることはうれしいようで、学校に行くことを嫌がることはありませんでした。そして、卒業式では、号泣でした。

Q23

集団登校に参加させてもらえるでしょうか。

A ◇もちろん、参加できます。子どものためには、集団登校がきっといいでしょう。親の付き添いが必要な場合もありますが、できれば付き添って、いっしょに歩いてあげてください。異年齢の近所の子らとの得がたいふれあいのチャンスです。

●保護者の体験から

☆うちの子の場合、多動で飛び出したりするので、集団登校の登校班に親が付き添って、いっしょに行っていました。途中の踏切で○本電車を見ないと歩かない、というようなこだわりがありましたが、親がいくら言ってもそこから動かないのに、同級生が「行こうよ」とランドセルを押してくれると、素直に歩く、というようなこともありました。友だちの力は偉大だと思いました。

Q24

障害からくるさまざまなニーズに対して、どんな配慮が受けられますか。

A

【医療的ケアが必要な子どもの場合】

大阪府には、市町村が小中学校に看護師を配置するための費用を助成する「市町村医療的ケア体制整備推進事業」があり、たんの吸引、経管栄養、導尿補助などの医療的ケアが必要な子どもに対して、看護師資格をもつ介助員がケアを行っています。読売新聞の調査では、2010年度に大阪府内（大阪市、堺市を除く）で109人の子どもが、この制度を使って地域の小中学校で学んでいます。平成23年度当初予算では116人分の請求をしています。

【感覚過敏な子どもの場合】

●保護者の体験から

☆うちの子も過敏なので、マフや耳栓をしてもらっています。最近は、運動会のピストルも電子音にしている学校も多いです。

【体温調節ができない子どもの場合】

●保護者の体験から

☆暑い時にはアイスノンをつけてもらっています。プールの時は早めに上げてもらい、温水で体を温めてもらっています。

●教師の体験から

☆教室の座席の近くに、ストーブや扇風機を設置するなどの配慮をして、本人が体温調節できない部分をカバーして、健康の留意に努めます。

【てんかんの発作がある子どもの場合】

●保護者の体験から

☆発作が起こった時のために、学校の保健室に発作止めの座薬を置いてもらっています。学校によっては置いてくれないところもあるようですので、相談したらいいと思います。その後、救急車を呼んだり、親に連絡するなどの個々の対応をしてくれるようです。

●教師の体験から

☆普段から緊急体制についてよく話し合い、医師や保護者などとの面談などを通して、本人がてんかん発作を起こした時の対応を、全職員で確認し適切な処置がとれるように準備しています。



IV その他の疑問いろいろ

Q25 地域の小学校の校長先生と話をしたら、拒否されている感じでした。やはり、行かせるのはやめておこうかと考えているのですが。

A ◇それが本当なら、ぜひ教育委員会に相談してください。大阪府では、すべての公立の小中学校で、障害があるという理由で入学を拒否することはありません。むしろ、障害のある子もない子も「ともに学び、ともに育つ教育」を基本とし、推進しています。みんなに迷惑かけるかも？という心配もありません。自信をもって、入学準備を進めてください。

◇校長先生との話し合いの時は、教育委員会担当者の同席をお願いするとよいと思います。本人と保護者が納得するまで、何回も話し合いましょう。もし、話し合いが堂々めぐりにおちいる場合は、巻末にある相談連絡先までご相談ください。

●保護者の体験から

☆校長先生に懇談の時間を作ってほしいと申し出ただけで、「今は時間がない」という理由をつけて激しく拒否されてしまいました。その晩は、夫の前でつらくて大泣きしてしまいましたが、保育園の園長先生が教育委員会に連絡してくださり、教育委員会の方とすぐにお話しし、その後、校長先生から謝罪の電話をいただきました。入学前は不安がいっぱいでしたが、入学してみると、その心配は取り越し苦労だったことばかり。現場の先生方は、すごくよくしてくださり、校長先生

の態度だけで、入学をあきらめるなんてことをしなくて本当によかったと思いました。

☆うちの場合、最初にこれでめげてしまいました。歓迎されない、拒否されているようなところに来ても、子どものためにいい教育は望めない、子どもどうしのよい関係も築けないだろうと思ったのです。でも、結局、校区の小学校に転入しました。「拒否されている感じ」だけで最初にあきらめなかったらよかったと思います。今なら「障害のあるうちの子も、地域の一員。そんな子を入れずに、よい教育ができますか？ みんなのためにも、この地域のこの子をいっしょに学ばせてください。子どもたちすべて誰もが豊かに学べる、本当によい小学校にするために、うちの子を入れてくださいね！」とにっこりお願いできると思います。どうしても、わが子には、ここではよい教育は受けられぬ、とはっきり決めることができるなら別ですが、そう思えるまでは、おそれずチャレンジ、いい結果を生みましょう！



Q26

入学前、子どもに必要な配慮を学校にお願いしに行きたいのですが、いつごろ行けばいいのでしょうか。

A ◇4月から夏ごろにかけて、各市町村教育委員会が来年度の新入生の情報を収集し、その情報は、夏休み明けから、大阪府教育委員会へ上がっていきます。そこから大まかな学級設置数や人員配置の検討が始められます（最終決定は3月末）。

ですから、学校へは、まずは所属している幼稚園や保育所、通園施設の先生に相談したうえで、9月ごろまでに行けばよいでしょう。ただし、車いすを使っているなどで施設の改装が必要な場合は、予算をつける必要があるので、できるだけ早く（できれば1年以上前には）動くことをおすすめします。その場合、先に教育委員会にも話しておくとうよいと思います。

◇住んでいる市町村外の施設にお子さんがいたり、他の市町村から転入して小学校入学になる場合も、できるだけ早く、就学先の市町村教育委員会へ連絡してください。学校へは、教育委員会に連絡してから訪ねましょう。

●保護者の体験から

☆うちの子はオムツもしていたし、よその友だちの作った作品をさわったりこわしたり、目を離すと勝手にどこかへ行ってしまうような子だったので、学校に嫌がられないだろうか？という不安もあり、わが子の状態を正直に伝えにくかったのですが（苦笑）、先輩のお母さん方から、少しオーバーめに伝えるぐらいのほうがいいとアドバイスをいただきました。それは、先生方が困らないためでもあるので、あまりギリギリに伝えるよりは、少し早めから伝えるといいと思います。

Q27

地域の学校で、障害のない子の保護者ともうまくつきあっていけるでしょうか。

A ◇子どもどうしが友だちになるのと同じように、保護者も気がねなく障害のない子の保護者と親しくするのは大切なことだと思います。うまくつきあうというよりも、自分たち親子のことを多くの子どもたちやその保護者に知ってもらうことが、楽しい学校生活を送るための元気の源になります。

◇保護者にもいろんな方がいますが、大半の方は、障害のある子にも好意的です。あまり心配しなくてもだいじょうぶです。友人を作りたいなら、PTAの委員をされることをおすすめします。同級生の保護者だけでなく、上級生の保護者の方とも親しくなれるので心強いです。学校のいろんな情報も教えてもらえます。

●保護者の体験から

☆養護学校から地域の小学校に、4年生から転入しました。「子どもどうしはすぐに仲よくなれるけれど、しっかりできあがっている保護者の集団に入っていくのは大変」と周囲からは言われましたが、だんだん保護者どうしでお友だちもできてきました。健常のお子さんのお母さんに対しては、遠慮したり、話が合わない部分もあるけど、こちらから話しかけていけば、意外と向こうは気にしていないのだとわかりました。

☆上の子が健常児で年子だったために、参観や懇談が重なることが多く、参観には半分ずつだったけど、懇談は障害のある子の方ばかり参加していました。おかげで上の子よりも、障害のある子の学年のお

母さんたちにたくさんの知り合いができました。また、子どもが目立つ分、道を歩いていても、よく声をかけていただきます。自然に知り合い、自然につきあっていけるんだと思います。そして、知り合いが増えれば増えるほど、いろんな意味で支えてくださいます。義務教育はたったの9年間。これからの長い人生のためにも、ひとりでも多く、障害児の親ではない知り合いをつくっておくことをオススメします。

●障害当事者の体験から

☆私の母親は、私の友人の保護者と親しくなって、母親がしんどい時にいろいろと助けてくれた経験があります。



砂浜にスノコを敷いて、
ストレッチャーで移動

Q28

地域の学校に行って、もししんどくなった時、途中で支援学校に変わることはできるのでしょうか。

A ◇地域の学校→支援学校、支援学校→地域の学校、どちらの移動も遠慮はいりません。現に時々、転入されています。遠慮せず、教育委員会に相談してください。



手動式人工呼吸器を使って海で泳ぎました

Q29

将来、普通高校への進学も考えていますが、障害があっても高校を受験できるのでしょうか。

A ◇もちろん普通高校を受験できます。大阪府の公立高校には、特別な配慮を受けている障害生徒が約1558人います（2009年度現在）。ペーパーテストが0点で合格している例もあります。

◇受験の際は、問題用紙の拡大、受験時間の延長、問題文の代読、代筆解答、介助者の配置、別室受験、パソコンの使用などの「受検上の配慮」が受けられます。

◇高校入試の関門は低くありませんが、たくさんの方が普通高校に挑戦し、高校入試の関門が低くなることを祈ってやみません。

●保護者の体験から

☆この春うちの子が挑戦して、結果、「定員割れ」で幸運にも全日制の公立高校普通科に入学することができました。全日制で「定員割れ」が起こるのは非常に少ないようですが、定時制も視野に入れば「定員割れ」での高校入学は可能性が高いです。

また、「知的障がい生徒自立支援コース」や「共生推進教室」という知的障害の生徒が府立高校で配慮を受けながら学べる制度もあります（但し、募集人員が少ないので競争率は高いです）。私学の高校や高等専修学校でも、障害をもつ生徒を受け入れ、配慮した授業やクラスを用意しているところがあるので、情報を集めてください。中2になったら、どんどん見学や体験に行けば、中3の秋には行きたいところ、行けるところが、親子に見えてくるはずです。

「いい人といっぱい出会って、ぼくの未来を助けてくれる人を一人でも二人でも見つけて、友だちをつくります。いい人に育てます。ぼくもともに育ちます」。自立支援コースの入試面接時、「本校に入ったら、勉強やいろいろな活動など、どんなことをがんばろうと思いますか？」と聞かれ、息子が答えたことです。こんなことを考えているのか、と思いました。

☆最重度の知的障害がありますが、誰でも受験できることを知り、まずは、大阪府立高校の知的障がい生徒自立支援コースを受験しました。試験は保護者同伴の面接のみですが、母ひとりで連れて行くのがしんどいような子なので、両親そろって面接に臨みました。しゃべれないうちの子に代わり、親が受け答えをしました。残念な結果となりましたが、障害の程度では可否判定しないということでした。一般受験はしませんでした、少し考えていました。もし、受験するのなら、公表されている配慮項目以外に、いろいろ配慮をしてもらえることになっていました。これは、無理だろう～と勝手に思わずに、受験時の配慮に必要なことは、どんどんお願いすればいいと思います。

●障害当事者の体験から

☆早くから準備するとよいと思います。私の母親は、私が小学校高学年のころから、高校受験に向けて意見発表や、受験に関する情報を集め、教師といっしょに受験における配慮について、いろいろな方法を試しながら申請にこぎつけました。私は別室でパソコンを使い、1.3倍の時間延長と問題用紙の拡大という配慮を受けて受験し、合格しました。

V 地域の学校で学んで

～障害当事者からのメッセージ

「こころは同じでしょ。」
—地域の小中学校に通っていた！君の思い—

ぼくは、27歳になります。今は、作業所で働いています。

小学校や中学校では、みんなと一緒に遊んだり、勉強したり。とても楽しい時間を過ごすことができました。ぼくは手を添えてもらえば、自分の考えたことや思ったことを書くことができます。小学校のとき、入りこみの先生が手を添えてくれて、字を書く練習をしました。そして、考えていることや思っていることが伝えられるようになりました。先生が「手がだるくなったからやめようよ」と言っても、ノートいっぱい数字やひらがなを書いていました。みんなががんばっているの、ぼくもがんばって書きました。中学校卒業前の思いをこう書きました。

いまいちばんおもうことは 中学校がたのしかったということです。
それはぼくをげんきにしてくれたし ぼくをしあわせにしてくれた。
たとえば みんなとわらったり ないたり、おこったりしたことが
みんなよかった。そつぎようしたら ぼくは どうしたらいいの
かと おもうから かなしくなってくる。

高校入試の時、テスト問題や解答用紙を拡大してもらって、中学校の先生に筆記介助をしてもらって問題を解きました。一生懸命がんばって、一般入試で無事、地域の普通高校に合格することができました。高校にいったみんなと一緒に、普通の生活がしたかったのです。

高校の時、ずっとこう思っていました。

みとめてよ みとめてよ ちがい
ころは おとな ころは おなじ
うれしいし さみしいし つらい なくよ そしてね いつもね
わかるよ

うん ぼくね ともだちいるよ！！ そして たすけてもらいた
い！！ でもね 「あかちゃん あつかいしないでください！！」
そして「みんなとおなじきもちで せっしてください」
ぼくはね ころの こと いってる。からだのことで せつな
い せつない だのに いっしょは ちがう → そのことが ち
がうけど いっしょ。

ぼくは、話したり、一人で字を書いたりはできません。だから何も
できないと誤解されます。

障害があっても、ころはみんなと同じでしょ。もっと、もっとわ
かってほしいなあ。

いのちと向き合い、共に生きるということ

折田 涼

わたしは、進行性脊髄性筋萎縮症で、生後6ヶ月から人工呼吸器をつけています。3歳で退院してからは、ずっと地域の中で暮らしてきました。身体的には全身寝たきり状態ですが、ストレッチャー式車いすに乗って、地域の保育所、小学校、中学校、高校に通ってきました。

当時は、保育所への入所も小学校への入学も、行政と何度も交渉しないと入れませんでした。また、人工呼吸器をつけていることから生じる、吸引などの医療的ケアが問題となり、親の付き添いを求められたりしました。しかし、家族や支援者と共に粘り強く交渉を行い、小学校5年生から親の付き添いなく学校に通えるようになりました。寝たきりの状態で24時間人工呼吸器をつけ、地域の学校へ親の付き添いなく通ったのは、全国でも初めてのことです。

学校生活では、先生方やともだちが、わたしもクラスの生徒の一人としてあたり前に接してくれ、様々な創意工夫を凝らしながら学校生活に取り組んでくれたので、わたしは、たくさんのともだちと一緒に遊び、学び、多くの経験、体験をすることができました。

通学では、雨の日も風の日も雪の日もありましたが、集団登校の上級生が迎えに来てくれて、みんなと一緒に登校しました。人工呼吸器をつけているから出来ないと思われるようなことも、人の手を借りながら、なんでもクリアしてきました。遠足、プール、運動会、修学旅行。わたしの周りには、いつもともだちがいて、何でも一緒に出来るように考え、手伝ってくれました。わたしは、ともだちと一緒にいろいろなことが出来るのがとても嬉しく楽しかったし、ともだちも同じ思いであったと思います。

臨海学舎では、海に入る為に砂浜にたくさんのスノコを並べて道を

作り、車いすで歩けるようにしてくれました。「涼くんも一緒に海で泳ぐやんな!」と、ともだちが言ってくれ、先生方が入念な準備をしてくださり、実現できました。海で泳げたことは、小学校生活の中でも一番の思い出になっています。

日々の学校生活では、休み時間に遊ぶ時も、給食を食べる時も、日直の仕事をする時も、わたしがそこにいることが当然の日常の風景としてありました。だから、クラスメイトも、障害があるとか、人工呼吸器をつけているとかとは関係なく、いつも当たり前のもだちの一人として、わたしと付き合ってくれました。こうした自然な関係ができたのは、ずっと、同じ場所で、同じ時間を過ごし、一緒に学んでこられたからだと思っています。

呼吸器をつけている子も、ストレッチャーに乗っている子も、一緒に学ぶことができる学校はとてもステキな学校です。このような学校で学ぶことができ、工夫をし、手助けしてもらいながらも、様々なことにチャレンジできたこと、たくさんの人に出会い、ともだちに恵まれたことは、わたしが今後、自立生活を送っていくための自信と勇気の元になっていると感じています。また、一緒に何でもし、どこへでも一緒に出掛けたことは、わたしだけではなく、ともだちにも先生方にも豊かな経験となって積み重なっていったことと思います。

きっと、わたしと一緒に育った人達は、社会の矛盾やバリアも自分のこととしてより身近に感じてくれていたことでしょうし、創意工夫で障害のある人とも一緒に生きることができる、そんな学校や社会はステキだと感じてくれたことと思います。そして、この経験が、今後、社会の中で生きていくときに、様々な場所で、また障害のある誰かと、ともに生きることができる豊かな社会を作るときにきっと役立つはずだとわたしはと思っています。

たくさんの仲間に出会い、
色々な事を学びあい笑いあった
上田哲郎

私は養護学校で2年間、その後豊中の小中学校の普通学級で育ち、高校は隣接した市の、個性あふれるやんちゃな仲間が多い公立高校で過ごしました。高校卒業後、身体障害者対象の職業訓練校に通いながら大学を目指すため夜間は予備校に通い、大学は、大阪でも関西でもない佐賀県にある福祉系の大学に進みました。卒業後一年半レスパイト施設で働きましたが、福祉を再び学びたいと思い通信制の大学院へ入学。修了後は地元の自立生活センターでピア・カウンセラーとして働きながら、近隣の高校で非常勤講師として地域福祉を教え、他には作業所の代表等もやらせて頂いております。

これまでを改めて考えてみると高校時代から人生が面白くなってきたように感じます。先にも話したように私が通っていた高校は個性あふれるやんちゃな仲間がたくさんいましたし、留年された先輩方もいる、そんな環境で育ちました。世間一般の常識では「良くない」といわれそうな経験も含めて、実に様々な経験をしてきました。

また、高校時代から関わり続けてきた『障害』をもつ仲間と共に歩む豊中若者の集い（通称とよなかかわかつど）は私にとってとても大きな存在です。とよなかかわかつどは豊中の全中学校を対象として、卒業生、保護者、教職員に呼びかけ、『障害』をもつ仲間と共に生活するための、悩みや取り組みの交流をはかる場であります。そこではたくさんの仲間に出会い色々な事を学びあい笑いあいました。もちろん私はお客さんではなくて、友達であり先輩であり後輩でありました。とよなかかわかつどの仲間と初詣に行ったり白浜まで初日の出を見に行ったり、私の中学の頃の友達ととよなかかわかつどの友達とで夜中に花火もやったりもしました。またとよなかかわかつどの友達と恋仲にもなっ

てたような気がします。その恋仲の結果はというと私が九州に旅立ってしまったので……という事にしておきます。

私が九州の大学で4年間も過ごせたのは、この大阪の小・中・高校で生活を送ってきた経験があったからこそであって、もしも別学で教育を受けていたら、親元を離れた600キロ先で4年間の一人暮らしは考えられなかったと思います。

障害者はよく経験を奪われてるといわれますし、実際にそういう場面も目にしてきました。私自身の経験からしか言えませんが、善い経験悪い経験各々の人生経験はたくさんあればあるほど地域であたりまえに、ありのままに生きていくことができますし、大人になった今、障害児も健常児も「地域で共に育つ」ことを大切にする大阪で育ったが故に今の私があるのだと思います。

おわりに 障害がなかったら地域の学校に行くやんか！

北口昌弘（大阪バリアフリーネットワーク 代表）



（向かって左から）折田涼、北口昌弘、上田哲郎

ひとりの子どもなのに、障害があるからといって、どうして地域の学校か、支援学校のどちらかを選ばなければならないのでしょうか？

地域に住むひとりの子どもなのだから、地域の普通学校にあたりまえに通うことができる社会になってほしい！

障害があるという理由で、分けられた空間で教育を受けさせられるのは、私たちを別の存在として考えていて、ひとりの人間としてあたりまえの存在になっていないと思います。

障害があってもひとりの人間、ひとりの子どもとして、ともに学び、ともに育ちたい思いを強くもっているのです、分けられることが、私にとって、ものすごく嫌であります。そして、私だけでなく、障害をもつ人の多くはこのような思いを持っています。

『障害のある子どもの小学校入学ガイド Q&A』編集委員

井村恵美	折田 涼	片岡次雄	桂 清子	北口昌弘
合田享史	鈴木留美子	田邊美香	豊高明枝	N. T
	前田美貴代	村上和典	山口正和	

ひとりで悩まないで、相談してください 就学や学校生活のことで困ったときの相談連絡先

【北摂地域】

- 「障害」のある子どもの教育を考える北摂連絡会（代表：鈴木留美子）
(Tel) 090-9166-5575 (Mail) rumikos@k9.dion.ne.jp
- 大阪バリアフリーネットワーク（代表：北口昌弘）
(Fax) 072-695-0840 (Mail) masahiro-fwnc9850.@docomo.ne.jp

【北河内地域】

- 知的障害者を普通高校へ北河内連絡会（事務局：松森俊尚）
(Tel) 090-1960-3469 (Mail) matumori@crux.ocn.ne.jp
- みんなでつくる学校 とれぶりんか
「しるべサークル」（代表：中川雄二）
(Tel) 090-4289-5317
- ひらかた市支援学級保ゴ者会（代表：井村恵美）
(Tel) 090-9167-7187 (Mail) chip-dale@kcat.zaq.ne.jp

【大阪市内】

- 障害児の高校入学を実現する大阪市民の会（代表：片岡次雄）
(Tel) 080-5333-2444 (Mail) kata_nif@nifty.com

【大阪府全域】

- 高校問題を考える大阪連絡会（代表：鈴木留美子）
(Tel) 090-9166-5575 (Mail) rumikos@k9.dion.ne.jp
- 障害者の自立と完全参加を目指す大阪連絡会議（事務局：西尾元秀）
(Tel) 06-6779-8126

【医療的ケアが必要な子どものこと】

- 人工呼吸器をつけた子の親の会〈バクバクの会〉
(Tel/Fax) 072-724-2007 (Mail) bakuinfo@bakubaku.org
- 医療的ケア連絡協議会
(Tel/Fax) 072-721-5150 (Mail) info@renkyo-kujira.org
- 寝屋川市の義務教育における医療的ケアを考える会（代表：石橋進一）
(Tel/Fax) 072-826-1121 (Mail) shi_ishibashi@mac.com

